

ハーバード大学在学時の有島武郎と

その周辺（資料の紹介を兼ねて）

栗田 廣美

○はじめに ○有島武郎とハーバード大学（学籍等に関する問題——有島武郎の学籍簿——ハーバード大学の諸資料——有島の学籍と所属——有島在学当時の大学組織——学生の構成——金子喜一の学籍等） ○有島武郎の学生生活（ハーバードにおける有島の「生活圏」——有島の「時間割」と日常生活——ハーバードにおける有島の一年間——講義を受けた期間） ○おわりに・註・補論

○はじめに

一九〇四（明治三七）年九月、有島武郎は、一年間にわたるペンシルヴァニアでの生活を終え、マサチューセッツ州ケンブリッジ（ボストン北郊）のハーバード大学に移った。有島のアメリカ留学期の中でも、最も問題多い「ニューイングランド時代」^①の始まりである。

それまでペンシルヴァニアでは、（新渡戸稲造との関係もあり）クエーカー上層社会に一応「保護」^②されていた有島も、いよいよ、このニューイングランドの地で、「アメリカ」という異文化存在と直接、より激しく出会うことになる。おりしも有島は、ペンシルヴ

アニア時代末期、精神病院での孤独な労働生活の中で「生れた当時のやうな」^③「渾沌とした」^③精神に陥りつつあったし、しかも時代は、そういう有島を更に圧迫するかのようになり、彼にとっての「つびきならぬ、テーマであった「国家」問題が、鋭く露呈した時期、即ち、旅順攻防戦から日本海海戦へと向かう日露戦争後半期にも当たっていたのである。

——有島の「ニューイングランド時代」は、まさにこのような条件の下にあり、そして事実この時期に、有島は（かつての定山溪自殺未遂に匹敵する）青春最大の思想的危機を迎え、やがて、それを突破する形で、「彼ノ激烈ナル觀念」^④「非国家的思想」^④を獲得するに至るのである。

ハーバード大学を「中心」とするニューイングランドの地は、従って、有島にとって、今まで考えられていた以上に大きな意味をもつ、「思想的戦場・熔鉱炉」⁽⁵⁾だったのではないか。——筆者は、こうした観点から、別稿『激烈ナル観念』の成立』⁽⁶⁾で、ニューイングランドにおける有島の「危機と転生」に迫りたいと考えており、本稿では、そのための資料的・前提を、可能な限り整えたいと思っ

ている。⁽⁵⁾
この時期の有島武郎については、既に瀬沼茂樹、小玉晃一両氏を始め、いくつかの優れた研究・資料紹介がある。しかし、有島の精神史にとっての、「ニューイングランド時代」の重要性を考えるなら、まだまだ資料的な基礎作業そのものも、続けねばなるまい。

このような立場から、以下本稿では、ハーバード大学在学時の有島、及び彼の生活環境等にかかわる伝記的諸事実の一端を明らかにしたいと考えている。

なお、この時期に関する問題のうち、①マクシム・ゴリキーやエンキエーウィチとの「出会い」については、拙稿『有島武郎と「ゴリキーの小品」及び『西方古伝』について』⁽⁶⁾で、また、②一九〇五年一月以降有島が同居して影響を受けたF・W・ピーボデー⁽⁷⁾については、拙稿『弁護士ピーボデー』⁽⁷⁾で既に記したので、ここでは触れない。

本稿で紹介する新資料等は、一九八五年に、筆者がハーバード大学等で収集したものである（写真も筆者撮影）。また、この内の一部は「有島武郎研究会」創立大会（一九八七年六月）でも発表した。

○ 有島武郎とハーバード大学

〈学籍等に関する問題〉

有島武郎は、ハーバードの町・ケンブリッジに到着した翌々日（一九〇四年九月二十九日）、大学に入学・受講登録の手続きをした。同日の日記記事を見ると、早くもこの日から「学課」が「開始セラル」ことがわかり、また、受講科目名・教授名も、以下の如く記録されている（有島記載のママ。便宜上番号を付す）。

- | | |
|---|--|
| ① | The Expansion of Europe since 1815
by Ass. Prof. Coolidge. |
| ② | The Fine Arts of the Middle Ages and Renaissance
by Prof. C.H. Moore. |
| ③ | Problems of Labor
by Prof. Ripley. |
| ④ | History of Religion in Outline
by Prof. G.F. Moore. |

そして同日午後には、さっそく「Labor Problem」の講義を、翌日は「美術史ト宗教史」を受講し「余ハ異常ニ興味ヲ以テソヲ聞キヌ」（傍点・傍線は、以下すべて栗田による）と感想を記している。

○
ところで、有島が「ハーバードで学んだ」という事実や、受講科目名等は、古くから知られていた（おそらくこの日記や書簡等、主として有島の側の資料からだろう）。ただ、一歩踏み込んで、有島がハーバード大学のどこに所属し、学籍はどうなっていたのか、また、有島の記す講義名等は「正しい」のか、それは如何なる内容の

講義なのか……と言ふことになる、そのほとんどは不明であり、従つて、有島「精神史」の前提たるべき、ハーバードにおける「学生生活」の具体相は、未だ見えて来なかつたと言えよう。

例えば、学籍一つに關しても、原年譜では「ハーバード大学の大学院に這入つた」とあり、『リビングストーン伝第四版・序』でも「或る大学の大学院に這入つた」とある一方、書簡では「今週よりはハーバード大学に参り（中略）Special Course を取りて一年を過さんと存居申候」⁽¹⁰⁾、或いは「本年九月下旬よりマサチウセツト州なるハーバード大学ニ移り茲にて一年間撰科を修め度しと存申候」⁽¹¹⁾等と表記していた故もあつてか、先学諸氏の記述は必ずしも一定せず、むしろ「選科」が一般的であつた。例えば、瀬沼茂樹氏は「ハーバード大学の大学院専攻科」⁽¹²⁾、小玉晃一氏は「ハーバード大学の選科」⁽¹³⁾、安川定男氏も「選科に入学を許され」としている。他に「ハーバード大学で学んだ」だけの記述も多い。また年譜も、昭和四二年の安川年譜が「選科にはいり」⁽¹⁵⁾、昭和四七年と五〇年の山田年譜が「選科入学」⁽¹⁶⁾、同五八年の内田年譜が「選科に聴講手続き」⁽¹⁷⁾であつた。

しかし今回の調査で、ハーバード大学の印刷物から有島の名前が確認できたほか、同大学ヒュゼイ図書館アイカインズ（Pusey Library, Collection of the Harvard University Archives）に於いて、有島武郎の学籍・成績簿が発見でき、有島の学籍や所属が確認できた（なお、これらの事実の概略だけは、拙稿『有島武郎と「ホルキーの小品」及び『西方古伝』について』⁽⁶⁾稿末の「註」に記しておいたが、これは、最新の『有島武郎全集』版年譜にも記載された）。またF・W・ピーボディーと共に、当時の有島に重大な影響を与

えたと考えられる、アメリカ社会民主党員・金子喜一の同大学在籍⁽¹⁸⁾も同様に確認できたが、彼の学籍簿は残念ながら発見できなかった。

〈有島武郎の学籍・成績簿〉

有島の学籍等を示す、大学側の第一の資料は、次々頁に掲げる〈図1・2〉のハーバード大学学籍・成績簿（原簿）である。以下に、記載内容を活字化しておこう。（イタリックの部分が、手書きの記載事項）

29 Sept. 1904 First Registration.	Years 1904—05
Record of Takeo Arishima	
1904—05 FIRST YEAR.	
(註：以下、受講科目と有島の受講結果を示す。 “SECOND YEAR.” 以後の欄は当然回の記載もない) (科目名の欄) Grades.	
註：Course./Half-Course. (半期) に分かれる	
History 1801	(Half-Course. の欄に) abs. (欠席)
Economics 901	(Half-Course. の欄に) abs. (欠席)
~1462	(結果は一切記述なし)
History of Religions 2	(結果は一切記述なし)
Five Arts 4	(Course. の欄に) abs. (欠席)
Division	History and Political Science
Scholarship, Fellowship	(記載なし)
Assistantship	(記載なし)
Austin Teaching Fellowship	(記載なし)
Instructorship	(記載なし)

Proctorship	(記載なし)
Degree attained at close of year	(記載なし)
College attended	(記載なし)
Honors at College	(記載なし)
Degree received: Where? When?	
S. B. Sapporo Agri. Coll. (Japan)	1901,
A. M. Haverford	1904
(註: S. B. = Scientiae Baccalaureus = Bachelor of Science A. M. = Artium Magister = Master of Arts)	
(註: 以下すべて記載なし)	
If not a Harvard Graduate: /How rated? /Vol. page	
Graduate Student elsewhere: /Where? /When? /In what subjects?	
Non-Resident Student: /Years/Where studying? /Address/ Date of Reports to Dean	
Remarks on Course	(記載なし)

この「学籍簿」からだけでも、我々はいくつかの事を確認できるが、その前に、「これと「組み合わせ」て理解すべき、他の諸資料について触れておこう。

〈ハーバード大学の諸資料〉

有島の学籍、および彼が在学していた頃のハーバード大学を知る上では、一九〇四〜〇六年に大学から発行された、次の三つの刊物が有益であろうと思われる。

- ① 『ハーバード大学カタログ』一九〇四〜〇五年版(図3=扉)
The Harvard University Catalogue 1904-05 (Cambridge: Published by the University, 1904)

② 『歴史学・政治学ディヴィジョン便覧』一九〇四〜〇五年版(以下「ディヴィジョン便覧」と略記・図4=扉) *Harvard University Faculty of Arts and Sciences Division of History and Political Science Comprising the Departments of History and Government and Economics 1904-05* (Cambridge, Mass.: Published by Harvard University, May 16, 1904)

③ 『ハーバード大学公式記録』ハーバードカレッジ学長・出納役報告書』第三巻4号・一九〇四〜〇五年版(これは「Harvard Annual Reports」の一部を構成しており、以下「年次報告書」と略記する。図5=扉) *Official Register of Harvard University Reports of the President and the Treasurer of Harvard College 1904-05, Volume III Number 4* (Cambridge, Mass.: Published by the University, January 30, 1906)

皆、前記ハーバード大学ヒュゼイ図書館^{アーカイブズ}文書館の所蔵である。

同館には、他にも、後掲古地図や当時の試験問題用紙若干、また稀には、学生のノートも保存されており、我々はかなりの程度まで有島の学生生活と、受講した講義内容に迫ることが可能である。

○

この内、有島の学籍に直接関連するのは、①の『ハーバード大学カタログ』一九〇四〜〇五年度版である。

この『カタログ』は七百七十頁をこえる浩瀚なもので、前掲②『ディヴィジョン便覧』や③『年次報告書』とともに、有島が在学した当時のハーバード大学の様子を知る上で大変便利なものだ。次章以後も必要に応じて紹介するが、この中に、「有島武郎」の名前が

7 ハーバード大学在学時の有島武郎とその周辺

29 Sept. 1904
First Registration. Record of *Takeru Furukawa* Years 1904-05

1904-05		Grades.	Grades.		Grades.	
FIRST YEAR.	COURSE.	HALL-COURSE.	SECOND YEAR.	COURSE.	HALL-COURSE.	THIRD YEAR.
History 18a ¹ Economics 9a ¹ - 14a ²		abs. abs.				
History of Religion ²						
Time spent 4		abs.				

Division *History and Political Science*
Scholarship, Fellowship
Assistantship
Austin Teaching Fellowship
Instructorship
Proctorship
Degree attained at close of year

College attended _____ If not a Harvard Graduate: _____ How rated? _____
Honors at College _____
Degree received *S.B. Sapporo Imp. Coll. (Japan)* 1901.
Where? When? *A.A. Haverford 1904.*
Remarks on Course _____

上<図1> 有島武郎のハーバード大学学籍・成績簿(原簿)

29 Sept. 1904
First Registration. Record of *Takeru*

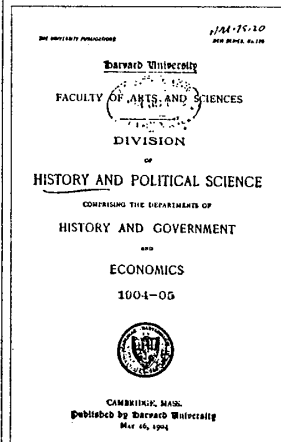
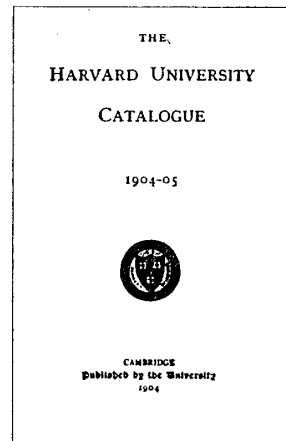
1904-05		Grades.
FIRST YEAR.	COURSE.	HALL-COURSE.
History 18a ¹ Economics 9a ¹ - 14a ²		abs. abs.
History of Religion ²		
Time spent 4		abs.

Division *History and Political Science*
Scholarship, Fellowship
Assistantship
Austin Teaching Fellowship
Instructorship
Proctorship
Degree attained at close of year

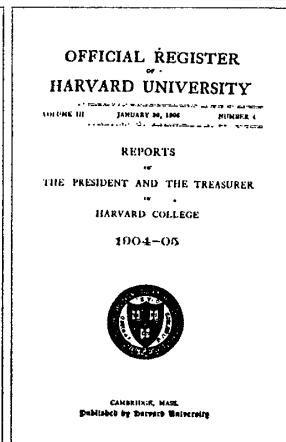
College attended _____ If not a Harvard Graduate: _____ How rated? _____
Honors at College _____
Degree received *S.B. Sapporo Imp. Coll. (Japan)* 1901.
Where? When? *A.A. Haverford 1904.*
Remarks on Course _____

左<図2> 有島のハーバード大学学籍・成績簿(原簿)主要部分

右<図3> 「ハーバード大学カタログ」1904~05年版・扉



<図4> 「デイヴィジョン便覧」1904~05年版・扉



<図5> 「年次報告書」1904~05年版・扉

二箇所出て来るのである。即ち「図6」の「大学院生名簿 Students in the Graduate School」及び「第一の「Resident Students」の項の五人目、図7「住所録 Directory」及び右欄十一人目である。記載事項を、それぞれ活字化しておこう。

図6	STUDENTS IN THE GRADUATE SCHOOL.
Each student is referred, in the following list, to the department or field of study in which his work mainly lies.	

STUDENTS IN THE GRADUATE SCHOOL.		
Resident Students.		
Each student is referred, in the following list, to the department or field of study in which his work mainly lies.		
NAME.	HOME RESIDENCE.	PRESENT ADDRESS.
Adams, Arthur Kinney, S.B. 1904. 1 yr. Geology.	Spencer,	36 Garfield St.
Adams, John Mead, A.B. 1903. 11 yr. Assistant in Physics.	Cambridge.	5 Howland St.
Albright, Victor Emanuel, A.B. (Ohio Wesleyan Univ.) 1901, A.M. (Harvard Univ.) 1904. Teacher of History and English, 1901-03, Todd Seminary, Woodstock, Ill. 11 yr. English.	Cranesville, W. Va.	10 Ashton Pl.
Andrews, Arthur Irving, A.B. (Brown Univ., R.I.) 1901, Graduate Student, Univ. of Wisconsin, 1901-02. 111 yr. University Scholar. History.	Providence, R.I.	D. 36.
Arishima, Takeo, A.B. (Sapporo Agricultural Coll., Japan) 1901, A.M. (Haverford Coll., Pa.) 1904. 1 yr. History.	Tokyo, Japan,	12 Kirkland Pl.
Armstrong, Gordon Nelson		7 Felton St.

上「図6」

下「図7」

716 HARVARD UNIVERSITY.	
Aldred, F. W., 3C. 61 Cushing, Waltham	Anthoine, E. S., 2L. 1734 Cambridge
Alderson, G. I., Lectr. [18] 123 Kent, B'kline	Apollonio, C., 1C. 68 Mt. Auburn
Aldrich, W. W., 2C. Claverly 36	Appleton, C. L., 1C. Claverly 35
Alexander, R. S., 1C. 56 Plympton	Appleton, F. R., Overseer [5] New York, N. Y.
Alexander, R. R., 1L. 12 Holyoke Pl.	Appleton, F. R., Jr., 2C. Claverly 32
Allen, A. R., s.S. C. 27	Appleton, W. H., 3C. Claverly 42
Allen, F. H., 2M. 490 Columbus Ave.*	Apthorp, R. E., 1S. Ridgely 76
Allen, H. S., 2L. 15 1/2 Shepard	Archibald, W. S., s.Ds. D. 12
Allen, J., 1C.	Arens, H. F., 2C. F. 16
Allen, M., 1C.	Arensberg, F. L., 4S. Everett 46
	Arishima, T., 1G. 12 Kirkland Pl.
	Arush, R. M., 2C. P. 21
	Armstrong, F. R. 2nd
	Armstrong, F. R. 2nd

図7	(五人目)	NAME. HOME RESIDENCE. PRESENT ADDRESS.
		Arishima, Takeo, Tokyo, Japan, 12 Kirkland Pl.
		A. B. (Sapporo Agricultural Coll., Japan) 1901,
		A. M. (Haverford Coll., Pa.) 1904. 1yr. History.
		Arishima, T., 1G. 12 Kirkland Pl.

〈有島の学籍と所属〉

——以上の資料から、少なくとも次の事が確認できよう。

【学籍】 先ず有島の「学籍」だが、図6で「Graduate School」

中の「Resident Students」欄に名前が記されている事から、ま

た「図7」の「1G」という記述が、大学院一年次所属を示す事か

らも明瞭だが、有島武郎は「Faculty of Arts and Sciences」に

属する「Graduate School」(大学院)一年次に在籍していた。従

って、「選科」等ではなく、「大学院」在籍である。

※ (Resident Students に関し) 当時ハーバードの「Graduate School」には、ヨーロッパ等に出かけて(通学せず)学籍を保持する

「Non-resident Students」が極く少数いた(次節参照)。それと区別

して、普通に通学している者を「Resident Students」と称し、有島

はここに登録されている。

【所属】 次に有島の学内的な「所属」だが、前述の如く「Faculty」

としては「Faculty of Arts and Sciences」の「Division」は「学籍

簿」に明記されているようだが、「History and Political Science」

(次節参照)であった(これらの事実も、一部は最新『全集』版年譜に記

載された)。「カタログ」名簿には、単に「History」と記されているが、これは、有島が同「Division」の中でも、主に歴史を専攻する学生だった事を示しているのではないかと思われる。

【受講科目と「成績」】「学籍簿」には、前掲「History 18a1」の如く、カリキュラム上の科目名しか記されていない。しかし、それぞれの講義内容は、後述の『ディヴィジョン便覧』や『年次報告書』「試験問題」等の資料で確認でき、結果的には、前掲の有島日記の内容(4頁の表)と、左表のように、対応・合致している。

また(書簡でも明らかだが)⁽²⁰⁾、有島はハーバードで「学位を取る」意向がもともと無かった。その「計画」通り、どの科目も「成績」は「欠席 abs.」ないし無記載で、一切「修得」はしていない。

有島受講科目関連事項を整理しておこう。

学籍簿の「History 18a1」が、4頁有島日記の①で、「Half-Course」の欄に「abs.」とあるように、前期半年の講義で「成績」は「欠席」である。
「Economics 9a1」が③。やはり前期半年の講義で「欠席」。
「同 14b2」は、前項に連続した後期半年の講義だが一切記載なく、実際に受講したか否かも不明である。担当は Carver 教授。
「History of Religions 2」は④。これも同様、結果は一切記述がない。
「Fine Arts 4」が⑤で、『迷路』の「M教授」のモデル C・H・ムーア教授の講義。通年「Course」の欄に「ats.」とあり、これも「欠席」である。

なお他の記載事項は、ヘンブリッジ第一の家への住所や既取得学

位等、従来有島の側から知られていた事と、当然総て符合している。

〈有島在学当時の大学組織〉

では、上記の如くに確認した有島の所属を、当時のハーバード大学全体の組織の中に位置付けてみよう。

〈図8〉が、前掲の『ハーバード大学カタログ』一九〇四〜〇五年度版の記述をもとに筆者が作成した、有島在学当時のハーバード大学組織図、及び、各部門の学生数である。これを見ると、ハーバード大学四千余人の学生中での、有島の位置がよく分かる。

〈Faculty of Arts and Sciences〉中の下線部「Graduate School」には有島は所属していた。学生数で分かるように、この「Faculty」はハーバード最大の組織だが、実態は、「学部」にあたるハーバード

〈図8〉 有島在学当時のハーバード大学組織図・学生数(1904~05)

組織(概略)	学生数
Harvard University	
I Faculty of Arts and Sciences	2905
① College	(2009)
② Scientific School	(530)
③ Graduate School ※1	(366)
II Divinity School	43
III Law School	758
IV Faculty of Medicine	413
① Medical School	(307)
② Dental School	(106)
V Bussey Institution	33
VI Summer School of 1904	(1007)
正規の学生総数※2	4136
教員総数525(内、教授100/准教授6/助教授56)	

※1 この内17名が外国等に居住し、通学せずに学籍を保持している「Non-Resident Students」で、残り346名が、正規に通学している「Resident Students」である。

※2 サマー・スクールの学生、及び二カ所以上に登録されている学生数(16名)を引いた数。

〈図9〉同Faculty of Arts and Sciencesの構成 (1904~05)

Faculty of Arts and Sciences		
Divisions and Departments		
I Semitic Languages and History		
II Ancient Languages		
A. Indic Philology		
B. The Classics (Greek, Latin)		
III Modern Languages		
A. English		
B. Germanic Languages and Literatures		
C. French, and other Romance Languages and Literatures		
IV History and Political Science		
A. History and Government		
B. Political Economy		
V Philosophy		
VI The Fine Arts		
A. History and Principles of the Fine Arts		
B. Architecture		
VII Music	VIII Mathematics	IX Engineering
X Physics	XI Chemistry	
XII Biology [A. Botany /B. Zoology]		
XIII Geology [A. Geology and Geograpy/ B. Mineralogy and Petrography/C. Mining and Metallurgy]		
XIV Anthropology		

カレッジの学生が大多数で、「大学院」にあたる〈Graduate School〉は三百人余であった。(なお、このハーバード・カレッジは当時男子専門、「女子部」に当たる姉妹校ラドクリフ・カレッジには、有島在学の直前、一九〇〇〜〇四年度に、ヘレンケラーが在籍していた。)

〈図9〉が、この〈Faculty of Arts and Sciences〉内部の組織図である(やはり前掲『カタログ』によって筆者作成)。各〈Division〉は、「学部」も「大学院」も通した「縦割り」構成になっているように、講義にかかわる記述を見ると、科目毎に「学部・院共通」とか「主として学部生向け」とかの区別がされている。

——有島は、表中の下線部〈History and Political Science〉に属し、同時に〈The Fine Arts〉の C・H・ムーア教授の講義も

受けている。

この表を見ても、当時から〈Faculty of Arts and Sciences〉は大変充実していたことがわかる。が同時に、当時の有島にとって、この〈Division〉選択が、やはり自然だった事も明らかだろう。

〈学生の構成〉

前掲③『年次報告書』からは、当時の学生構成がよく分かる。以下、有島が所属した〈Faculty of Arts and Sciences〉の大学院〈Graduate school〉(以下G S A Sと略記)に絞って様子を見てみよう。

〈図10〉は、有島が在学するまで八年間の、G S A S学生の出身地(出生地)別一覽である⁽²¹⁾。この表を見ても、十九世紀末から二十世紀初頭、既にG S A Sは「全米化」「国際化」しており、しかもその傾向を強めつつあったことが分かる。学生総数に対する、「地元」ニュージーランド出身学生の占める割合は、一八九七〜九八年度でも四〇%程でしかなく、有島が在学した一九〇四〜〇五年度には、既に三〇%程に減っており、かわりに、東部・西部諸州、外国出身者が増えている。次章冒頭に記すように、ハーバードには、(ペンシルヴァニアのハヴァフォード大学とはちがう)複雑多様な雰囲気、が漂っていたと言えよう。我々は、ペンシルヴァニア時代と比べて、この面でも、有島の「世界」の「広がり」に留意すべきだろう。

TABLE X. — BIRTHPLACES OF GRADUATE STUDENTS: 1897-1905.

	76-79-01	75-78-01	74-77-01	73-76-01	72-75-01	71-74-01	70-73-01	69-72-01	68-71-01
Students born in the New England States	132	142	141	108	109	107	127	122	121
Students born in other Northern States east of the Mississippi River	21	31	31	14	11	16	17	15	89
Students born in Southern States east of the Mississippi River	42	35	35	39	39	30	34	30	26
Students born in States west of the Mississippi River	19	17	17	16	22	21	23	25	18
Students born in the Dominion of Canada	39	35	35	26	27	23	26	17	20
Students born in other foreign countries	395	427	427	325	315	353	341	336	293
Total number of students	33	33	39	62	66	64	64	57	59
Percentage of students born in New England	67	61	61	62	66	64	64	57	59
Percentage of students born elsewhere									

〈図10〉出生地別一覧

TABLE VII. — FIRST-YEAR MEN: PERCENTAGE FROM VARIOUS COLLEGES AND UNIVERSITIES—1901-02, 1902-03, 1903-04, 1904-05.

	1901-02	1902-03	1903-04	1904-05
Harvard	31	33	38	40
Other New England Colleges	14	20	21	12
Colleges in the Central States	34	24	18	26
Colleges in States West of the Mississippi	9	12	9	12
Colleges in Southern States	4	6	7	5
Colleges in Canada	7	3	3	2
Foreign Universities	7	7	4	3

〈図11〉出身大学種別一覧

TABLE IX. — COLLEGES AND UNIVERSITIES REPRESENTED BY FOUR OR MORE GRADUATES IN THE SCHOOL: 1900-01, 1901-02, 1902-03, 1903-04, 1904-05.

	1900-01	1901-02	1902-03	1903-04	1904-05
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8
Yale	9	7	7	10	8
Harvard	107	189	174	232	192
Amherst	11	8	11	14	14
Brown	10	8	10	12	9
Dartmouth	9	8	7	10	8

——以上の事は、有島がハーバード「社会」の中で、いかなる「位置」を占めていたかを、彼の生きた「場」の側から考える上で、正確に認識しておかねばならぬ事だろう。有島も金子も、確かに、複雑で多様な広がりをもつ学生集団の中にいたが、同時に、決して「対等な存在感」は持つ事の出来ぬ、存在だったのである。

なお、有島が「ハヴァフォード出身生」でもあったという、別の面から見れば、主要出身大学を表示した〈図12〉が参考になる。

一見して分かるように圧倒的多数がハーバードカレッジ出身だが、「その他」の中で、ハヴァフォード大学は、イェール大学やマースト大学と並んで常に「上位を確保」し続ける「常連」であった。この年も、有島を含め五名が入学している（なおこの年、ハヴァフォード大学出身者中、修士学位保持者は有島のみ、他は学部卒）。

従って、ハヴァフォードからハーバードへ、という進路そのものは、全米的に見れば「自然なコース」と見なされた事だろう。

この『年次報告書』からは、他にも多くの事が読み取れるが割愛し、とりあえず、有島が受講した科目の受講生数を示しておこう。

History 18a1	受講生六六名	(内、院生五名)
Economics 9a1	受講生一二八名	(内、院生一〇名)
Economics 14b2	受講生七九名	(内、院生一〇名)
History of Religions 2	受講生八九名	(内、院生一名)
Fine Arts 4	受講生五九名	(内、院生二名)

〈図13〉はこの報告書から抜粋・編集したものである。

右〈図13〉 受講生数一覧 (抜粋)
 中〈図14〉 金子喜一の学籍関係
 左〈図15〉 C.H.ムーア教授・名簿

18a 1/2. Asst. Professor Coonrine, assisted by Mr. Brian. — The Expansion of Europe since 1815. 5 Gr., 20 Se., 18 Ju., 8 So., 1 Fr., 4 Sp., 1 Sc. Total 66.
9a 1/2. Professor Rurery and Mr. Currie. — Problems of Labor. 10 Gr., 29 Se., 59 Ju., 29 So., 3 Sp., 3 Sc., 1 Lav. Total 128.
14b 1/2. Professor Carver. — Methods of Social Reform. Socialism, Communism, the Single Tax, etc. 10 Gr., 25 Se., 26 Ju., 13 So., 1 Sp., 2 Sc., 2 Di. Total 79.
2. Professor G. F. Moore. — History of Religions in Outline. The Religions of China and Japan, Egypt, Babylonia and Assyria, and the Western Sciences (including Judaism and Mohammedanism). The Religions of India, Persia, the Greeks, Romans, Germans, and Celts; Christianity. 11 Gr., 25 Se., 12 Ju., 24 So., 3 Fr., 4 Sp., 2 Sc., 8 Di. Total 89.
4. Professor Charles H. Moore, assisted by Mr. Pope. — The Fine Arts the Middle Ages and the Renaissance. 2 Gr., 14 Se., 22 Ju., 9 So., 1 Fr., 3 Sp., 5 Sc., 3 Di. Total 71.

Kaneko, Kiichi, Gr., Yokohama First Coll., Japan, 1897, (graduate Student, <i>Shinko Taiji, Japan</i> , 1897-99, Student, <i>Meidaikei Theol. School, Pa.</i> , 1901-02. 1 yr. Sociology.	Sasage, Japan, 49 Hawthorn St.
Kammerer, P. G., 10 Westmore 121 Kenhall, A. S., 10. Kenaley, R. V., 10, 1709 Cambridge Keniston, D. B., 37, 1208 Mass Ave. Kaneko, K., 10, 49 Hawthorn Kennedy, E. M., 10, W. H. 19 Kangiser, H., 21, 1707 Cambridge Kennedy, F. J., <i>Asst. Prof.</i> [14] Kangley, J. A., 40, Hampden 42 Kerner, C. E., 5 Mercer Circle	T. 11 7. 11 1208 Mass Ave. W. H. 19 [14] 5 Mercer Circle
OFFICERS OF INSTRUCTION AND ADMINISTRATION.	
APPOINTED WITHOUT LIMIT OF TIME OR FOR MORE THAN ONE YEAR.	
PROFESSORS, DIRECTORS, INSTRUCTORS, ETC.*	
CHARLES HERBERT MOORE, A.M., Professor of Art, and Director of the William Hayes Fogg Art Museum, 29 Follen St.	

これも、有島の勉学生活を想起する、いま一つの手掛かりである。例えば、有島にとって大きな問題となるC・H・ムーア教授の講義では、有島が、ただ二人しかいない院生受講生の一人だったこと、また、「労働問題」はGSSA内では「大講義」で、その院生受講生十名の内二人が、おそらく有島と金子喜一だったこと等である。

〈金子喜一の学籍等〉

有島の学籍簿(原簿)は、前述の大学文書館^{アライヴ}で発見できたが、金子喜一のものとは発見できなかった(散逸したらしいとの事)。結局、金子のハーバード大学学籍は、大学側資料としては、現在の所(既に前掲拙稿『有島武郎と「ゴルキーの小品」及び「西方古伝」について』で発表した)『カタログ』所載の名簿・住所録から確認するほかない。関連事項でもあるので、**図14**に再掲しておこう。

【「経歴」等】 これを見ると、金子喜一は「日本ササゲ」の人間とあり、『神奈川県労働運動史』等からの「神奈川県久良岐郡笹下村松本」出身という記述(川上美那子氏『金子喜一考』等)⁽²³⁾と符合する(ただ外国の大学に、「日本ササゲ」と登録する精神に、独特の個性が感じられるのだが)。学歴についても、一八九七年「横浜英和カレッジ」卒、九七〇九九年に「日本のシンキョウ・ユニヴァーシティ(未詳)」大学院生とされているが未確認である(「創作」だった可能性もおうが)。また、一九〇一〇二年度ペンシルヴァニアの「メドヴィル神学校」在学とあるのは、例えば川上美那子氏が

〈The Progressive Woman〉から「渡米後、ペンシルヴァニア州の神学講座に通学」⁽²³⁾とされている事の内容であろう。

末尾に「Sociology」とあり、川上氏前掲文の「ハーヴァード大学の社会学研究過程」に対応しよう。が、当時のハーバードに当該「デイヴィジョン」はなく、この「社会学」は、有島の「歴史」同様、言わば「専攻」を示すのではなからうか。考えられるデイヴィジョンは、無論有島と同じ〈History and Political Science〉である。住居については、後述「有島の生活圏」で触れる事とする。

前述のように、学籍簿が発見出来ぬので、彼の受講科目等を、大学側の資料から再確認することは出来ない。ただ従来も金子側から、例えば、瀬沼茂樹氏『社会主義者金子喜一』⁽²⁴⁾には、「週刊平民新聞五九号」所載の『ポストン便り』を引いて、彼の受講科目が「ヘビーボディ教授」「社会問題の倫理」、リプレイ教授「労働問題」、ムンロオ博士「市政」⁽²⁴⁾だった事が記されている。

【有島武郎との出会い】 この、金子喜一の受講科目の中で注目されるのは、「労働問題」である。これが〈Economics Sal〉を指すことは、担当教授名からも、この年度のカリキュラムからも、間違いない。とすると、金子喜一は、この講義で有島と会った可能性が強く、だとすれば、次のような推測が可能である。

——つまり、この講義の日程(後掲「時間割」参照)からして、有島のハーバード大学第一日目、一九〇四年九月二九日(木曜)第六時限(午後一時半〜二時半)に、早くも二人の「運命的」な出会

いがあった可能性が非常に大きいと、推定されるのである。

とすると、我々は当然、『迷路』の本編第三章を思い出す。主人公AはL教授(当然、実在のリプレイ教授が想起される⁽²⁵⁾)の「開講」で「参考書」を紹介され、「秋」の「午後の陽」の下、「学則の切端」が散らばるキャンパスを歩き、「図書館」で(フロラに会った後)Kに出会うわけだ。——受講登録をした日の、午後の講義で金子喜一に出会った事が、背後に感じられるのである。

有島が、ハーバード在学時の「いつの段階で」金子喜一に会ったかは、今後、この時期の考察にとって重要だが、その一つの手掛かりとなる。ここでは、以上にとどめておく。

【C・H・ムーア教授の名簿記事】前掲『カタログ』にはC・H・ムーア教授の「肩書」や住所も載っている。彼については別稿で詳述する予定であり、ここではコメントぬきで \langle 図15 \rangle に示しておく。なお『迷路』のフロラとの関連で、念のため「図書館員」に、ムーアの娘等がいるか否かも調べたが、見当たらなかった。

では、こうした大学における「環境」をふまえて、有島がどのような「学生生活」をおくったのか、以下も引き続き、「外的事実の概略を、遠巻き」に、現在可能な限り明らかにしたい。

○ 有島武郎の学生生活

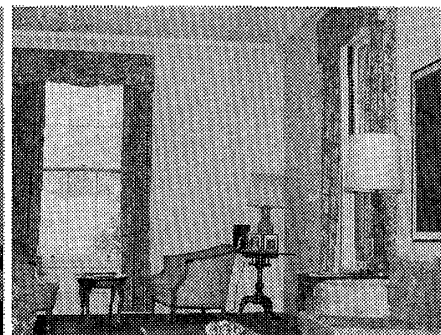
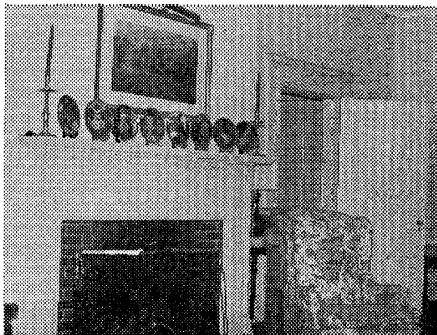
有島が、ハーバード大学に移る以前に在籍していた、ペンシルヴ



静かなカーランド・プレイスの立木の中。一階玄関左が有島の部屋と思われる。



静かで瀟洒な
ヘンブリッジ第一の家
旧ミス・パーマ方(現在)



(上) 西側の窓より、カーランド・プレイス越しにハーバード大学の日本文学研究室が見える。

(現住者、Don A. Orton氏の好意による)

有島の部屋と思われる、一階玄関左の部屋の内部(1968年に内部改装している)。正面の窓は西側に面し、カーランド・プレイスの小径が見える。

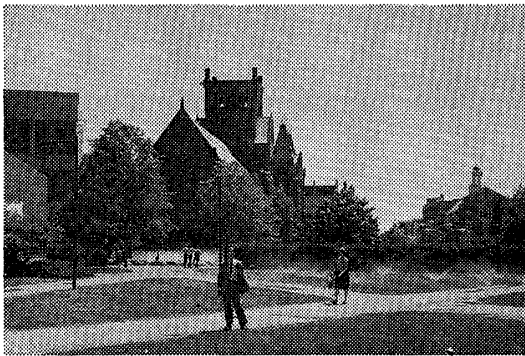
アニアの名門ハヴァァフォード大学は、いずれ別稿で詳述するが、小規模で家庭的な、暖かい学風のカレッジであった。

それに比べてハーバード大学は、(現在とは無論比較にならぬが)一九〇四年当時、すでに教員総数で五百余人。四千人を越す学生は、全米(「世界中」でもある)から集まった雑多な集団であった。確かに大学のあるケンブリッジの町そのものは静かな学都だが、それでも路面電車がキャンパスの道を走り、また南のチャールス川をひとつ越せば、もう巨大都市ボストンである。比喩的に言えば、有島はハーバードで初めて、アメリカの「世間に出た」のである。本章では、そういう彼の「生活圏」から見て行こう。

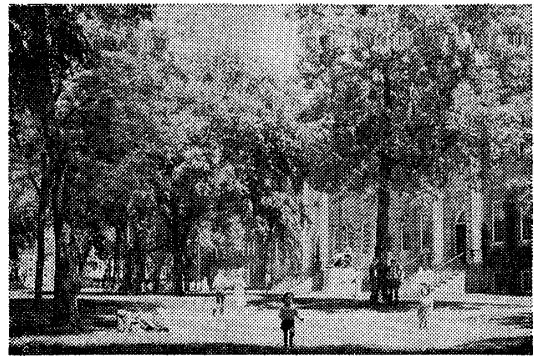
〈ハーバードにおける、有島の「生活圏」〉

有島武郎は、ニューイングランドに出て来た一九〇四年九月二七日から、ケンブリッジの〈Kirkland Place〉十二番地、ミス・パーマ方(ケンブリッジ第一の家)に入り、翌年一月、「弁護士ピーボディー」との同居生活を始めるまでの数か月を、ここで過ごすことになる。――以下、当時の有島の生活圏を、追っていく(なおボストンも、彼の「当時の生活圏」だが、今回は割愛する)。

次頁(図16)は、有島在学年度(一九〇四〜五年)に於けるハーバード大学周辺の地図(同大学図書館蔵)である。下方に蛇行するのがチャールス川(右が川下)で、その南がボストン、北がケンブリッジだ。



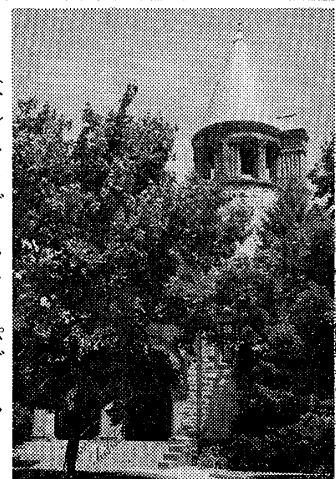
(上) メモリアルホール (地図C)



現在のキャンパス



(上) 〈第2の家〉 ピーボディーと同居したアパート(地図H)(ザ・グリーンエーカー)



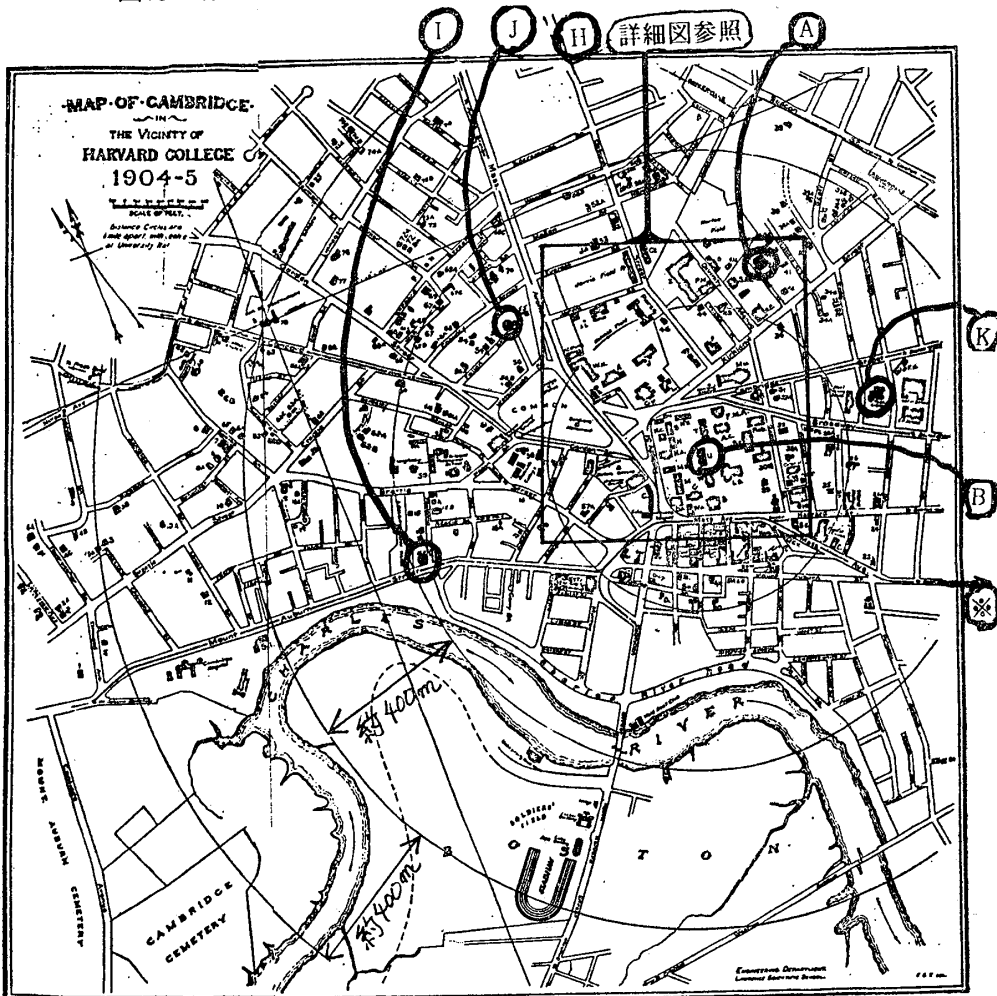
(右) ケンブリッジ・パブリックライブラリー(地図K)

(上) メインキャンパス・ハーバードヤードのハーバードホールあたり(地図B)

一見して、街路の配置が現在と殆ど同じで、当時も、キャンパスがそのまま市街に溶け込む如き学園町だった事がわかる。ただ当時は（現在は無くなった）路面電車の線路が、町並みを縫っていた。地図の道路中の黒線がそれで、かなりの路線である。——なお、有島は、フィラデルフィアから初めてポストンに着いた時、ポストンの「Parkよりcarニテ」、その「Cambridgeニ」に入ると書いてある（同日日記）。この「パーク」とはポストンの街路名（中心部の公園ポストンコモン横）であり、つまり有島は、パーク街の停留所から電車でケンブリッジに至ったわけだ。その時有島が乗った電車路線が、おそらく、この図（及び図17）右下方※印の路線であろう。

【ケンブリッジ第一の家】そして、〈図16〉上方右のAが、前述のケンブリッジ第一の家、ミス・パーマ方の下宿である。図を覆う四つの同心円は1/4マイル（約四百メートル）毎の距離を示すが、その中心Bの建物が、当時、大学の言わば「管理棟」だったハーバード・ホールであり、その周りがメインキャンパスであるが（写真参照）、有島は極く近くの「一等地」に住んだと言えよう。——より詳しく、四角で囲んだ部分

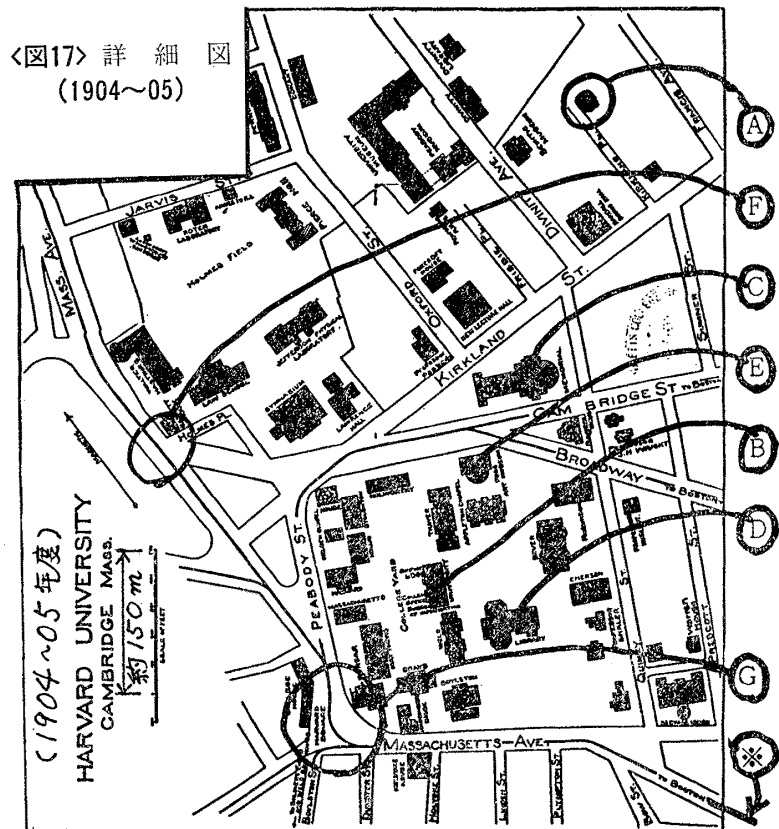
〈図16〉 有島在学当時（1904～05）における、ハーバード大学近辺地図




の詳細図〈図17〉を見てみよう。こちらも〈図16〉同様Aが有島の
下宿で、道路中の黒線が路面電車、また、この図に見える黒塗りの
建物群は皆大学関係のもので、神学部や大学博物館は「下宿のすぐ
隣」と言えるような場所（現在はAのすぐ向かいが日本文学研究
室、そして東洋関係のイェンチェン図書館）であった。



【下宿の環境等】 下宿は〈Kirkland Place〉という通りに面して
いたが、ここは、有島が「袋道ナレバ電車ノイマハシキ音モ聞エ
ズ」（日記九・二六）と記したように、電車道から離れた、奥まって
静かな、行き止まりの小径である。その一番奥に、ミス・パーマ方
の「12番地」がある。有島が「我が居ル宿ノ四辺モ亦紅葉。落葉ノ
錦ヲ布ケルガ如シ」（同日日記）と賛嘆し、「札幌など思ひ起し申候」
（書簡七五、宮部金吾宛）と書き送った榆ユの木立が、現在も古木として
生い茂り、その中に包まれた静かで瀟洒な家である（写真参照）。有
島は、その一室（写真）を借りていた。現在は近くのカレッジの学
長宅になっているが、当時の家主ミス・パーマは「老いたる寡婦」
（同書簡）で、有島の外にも数人の米人が下宿していた。



【メインキャンパスと、周辺】 〈図17〉で見ると、このAへケ
ンブリッジ第一の家からは、メモリアル・ホールC（写真）や、
メインキャンパスの旧中央図書館（現在は取り壊されワイドナー図
書館になっている）Dも、極く近い。また、同じメインキャンパス
内のEは、有島が明治三十八年一月三日、金子喜一と共に「フォウギ
ー博物館に行き、シラー記念会に出席」（英文日記）と書いたハーバ



ード大学フォグ美術館であった（現在は移転しているが、催し物開
催の伝統は生きている）。——なお、明治三十七年一〇月一六日、エマ
ーソンの故地コンコードに出掛けた際に、有島は、「煉瓦ノ色殊ニ赤
ナル Law Schoolノ角」（日記同日）つまりFの辺りから電車に乗っ
た筈である。Gは、交通の中心ハーバード・スクエアで、当時はす
べての電車路線が、ここに集中していた。

【ケンブリッジ第二の家】このように、有島が、ハーバード在学時の初期に住んだケンブリッジ第一の家は、実に恵まれた環境にあった。だが、やがて金子喜一を通して「弁護士ピーボディー」を知り、彼のアパート(写真)に同居するようになると、様子は少々変わってくる。このアパートについては前掲拙稿に記したので略すが、その位置は、の欄外に少し出た、Hの地点である。

【金子喜一の下宿】なお、『迷路』舞台の一つのモデルだとも思われる金子喜一の下宿は、にあった。前掲『ハーバード大学カタログ』の名簿によると、金子の住所は 49 Hawthorn Street であるが、『迷路』で、彼をモデルにした「K」が「B教授の家」に「置いて貰つてゐる」とあるので一応調べたところ、同時期、この同じ番地に、有島や金子が所属していたハーバード大学 Faculty of Arts and Sciences の、英語専任講師(Instructor in English)・Gustavus Howard Wainardier 博士 (Ph.D.) という人物が住んでいたもので、或いは小説の通り、「置いて貰つてゐる」たのかもしれないが、それ以上の事は分からなかった。

【ムーア教授の家、その他】同じく『迷路』に出てくる「M教授の家」のモデル、つまり、有島が大きな影響を受けたゴシック美術史の権威C・H・ムーア教授の家は、のJである。また、ムーア教授が、前述のシーラ記念会があったフォグ美術館の館長だった事は、に明らかであり、『迷路』の研究室のイメージも、この美術館と関係するかもしれない。

<図18> 有島在学年度 (1904~05) のハーバード大学当該ファカルティ時間割

HOURS AND EXAMINATION GROUPS COURSES REGULARLY OPEN TO FRESHMEN ARE								
Group	Monday, Wednesday, and Friday, at							
	7.45	9	10	11	12	1.30	2.30	3.30
Semite	3		1, 2a Egypt. 2					15, 15
Indic Philol.								1st, 1st, 2d, 2d
Greek	2, 3, 15	1st	11, 11	1	11			22
Latin	15		11-11, A	1, 6				22
Classical Phil.			11, 11, 11	11, 11, 11	11, 11, 11			22
English	1, 20 ^a or 3	2				BC		70 ^a , 70 ^a , 37 ^a
German	D, 10a	11, 30	C1, 1b, 3	2a	Swan, 1			C14
French	1c, 10	11-11, 11, 2c, 11			Swan			Swan
Rom. Lang. and Lit.	11a, 2	C, 14, 8	Span. 2, 3 C, 14, 8	Span. 4	Span. 1			
Slavic								
History	1a, 9, 30	8, 12a ^a , 12b ^a	10, 24	3, 14a ^a , 14b ^a , 20a ^a , 20b ^a	11 ^a		15	
Government			15	17	21 ^a			18 ^a
Economics	8a ^a , 8b ^a	7a ^a , 7b ^a , 12a ^a , 12b ^a	21	15	3, 10 ^a		2	18 ^a
Hist. of Relig.		12	1, 13a ^a	2 ^a , 13b ^a , 15			2	
Philosophy			2a	2a ^a			1a	4
Education							4	2
Fine Arts	4			1a	7a ^a		2a	2
Architecture		1b			2a		2a	2
Land Arch.	3				1, 3			
Music	2		2a	1	2		2	
Mathematics	2, 23	F1, 4, 7a	F2 ^a , 8, 8	F3 ^a , 10b	F4 ^a , 11, 11	30		15, 27 ^a
Astronomy	15 ^a							
Physics	11 ^a	8a ^a , 8b ^a	3	11, 9, 12 ^a	8, 8		11, 10 ^a	1, 12 ^a
Chemistry	21, 22							
Engineering		8a ^a , 11a ^a , 12a ^a , 17a ^a , 17b ^a	1st, 1st, 2d ^a , 6c ^a , 12a ^a	2d ^a , 4c ^a , 6a, 13b ^a	12c ^a	2a, 7a		
Forestry	3	7	2 ^a					
Botany	7				11 ^a		2 ^a	
Zoology		1, 5 ^a	2 ^a				2 ^a	10 ^a
Geol. & Geog.	8, 20b	12 ^a , 14 ^a , 10 ^a	1 ^a , 1 ^a	1 ^a , 1 ^a	1 ^a , 1 ^a		10 ^a	10 ^a , 15
Mineralogy		3						
Mining	10 ^a , 10 ^a							
Anthropol.		1			1 ^a , 1 ^a		2 ^a	
Hygiene								

* For Examinations. Students may elect Physics B with Greek A, 3, or 7, but must take both examinations the same day.

OF THE SEVERAL COURSES. PRINTED IN HEAVY-FACED TYPE.								
Group	Tuesday, Thursday, and Saturday, at							
	7.45	9	10	11	12	1.30	2.30	3.30
Semite			4, 4, 6	7, 11, 12	EGYPT. 1			2, 10
Indic Philol.								41, 6 ^a
Greek		3, 5, 4	11a	10				3
Latin					Div. Y, 2			3
Classical Phil.		2d ^a , 6d ^a	2d ^a					11
English		2d ^a	2d ^a			14, 22a ^a		12, 22, 31
German	12a ^a , 12b ^a		1c, 2b, 4	1a	20a ^a , 20b ^a	5		F, G
French		1a, 10	6, 6c, 9	10a, 11, 2a ^a , 10 ^a	10a, 14, 18			15 ^a
Rom. Lang. and Lit.	H. Phil. 5 ^a	H. Phil. 4	H. Phil. 3	H. Phil. 1, 10	C. Lit. 2			Celt. 1, 2 ^a
Slavic								
History		1a	1b	1c	1d			
Government		1, 11	12	10	4		9	
Economics		6, 10 ^a	4, 11	4, 51, 9b ^a		9a ^a , 14a ^a , 14b ^a	13 ^a	20a, 21
Hist. of Relig.								
Philosophy			51, 11a ^a	7	3, 18	16		3, 16 ^a
Education					21a			
Fine Arts		3						3a, 4b
Architecture				2b	2b			
Land Arch.								
Music					1a			
Mathematics			10	F1, C1, 12 ^a , 12b ^a	10			
Astronomy								
Physics		11 ^a , 12 ^a	2, 4, 11 ^a					
Chemistry			11	12 ^a				12 ^a
Engineering		1 ^a , 5b ^a , 6a ^a , 6 ^a , 6b ^a , 16a ^a , 16 ^a	10 ^a or 1, 13a ^a	1c, 8a ^a , 11a ^a , 16a ^a	5c ^a , 10c, 22 ^a			16 ^a
Forestry			11 ^a , 12 ^a					
Botany		3, 8 ^a				3a ^a , 2b ^a		
Zoology			11, 10, 10 ^a					10
Geol. & Geog.		20a					11	22
Mineralogy								
Mining		11, 4	9 ^a , 12 ^a	9 ^a , 3 ^a , 17 ^a	5 ^a , 11 ^a , 14 ^a , 20 ^a			
Anthropol.								
Hygiene								

* For Examinations.

〈図19〉 有島在学年度 (1904~05) のハーバード大学学事日程・七曜表

CALENDAR.

The meetings of the PRESIDENT AND FELLOWS are held on the second and on the last Monday of every month.

1904.

- Sept. 29, Thurs. Academic Year begins in all departments of the University.
- Oct. 1, Sat. Last day for receiving applications for the Bullard (Medical) Fellowships.
- Oct. 12, Wed. Stated Meeting of the Board of Overseers.
- Oct. 31, Mon. Last day for receiving applications of candidates for Final Honors in 1905.
- Nov. 1, Tues. Last day for receiving essays for the William H. Thordike Prize.
- Nov. 24, Thurs. Thanksgiving Day: a holiday.
- Nov. 30, Wed. Last day for receiving applications for the Cheever and Hayden (Medical) Scholarships.
- Dec. 1, Thurs. Last day for receiving applications for the Charles Eliot Norton Fellowship in Greek Studies for 1905-06.
- Dec. 1, Thurs. Last day for receiving applications for aid from the Loan Fund.
- Dec. 14, Wed. Stated Meeting of the Board of Overseers.

RECESS FROM DEC. 23, 1904, TO JAN. 2, 1905, INCLUSIVE.

1905.

- Jan. 2, Mon. Last day for receiving dissertations for the Boylston Medical Prizes.
 - Jan. 11, Wed. Stated Meeting of the Board of Overseers.
 - Jan. 14, Sat. Applications of candidates for the degree of A.M. or S.M. in 1905 must be made on or before this date.
 - Feb. 1, Wed. Second half-year begins in the Medical and the Dental Schools.
 - Feb. 13, Mon. Second half-year begins (except in the Medical and Dental Schools).
 - Feb. 22, Wed. Washington's Birthday: a holiday.
 - Mar. 8, Wed. Stated Meeting of the Board of Overseers.
 - Mar. 15, Wed. Last day for receiving applications for all Graduate Fellowships and Scholarships, and for College Scholarships to be assigned to Graduate Students.
 - Mar. 31, Fri. Last day for receiving applications for Divinity School Fellowships and Scholarships.
 - Mar. 31, Fri. Last day for re-engaging College Rooms for 1905-06.
 - April 1, Sat. Last day for receiving applications of candidates for Second-Year Honors.
 - April 1, Sat. Last day for receiving dissertations for the Bowdoin Prizes.
 - April 1, Sat. Last day for receiving theses of candidates for the degree of Ph.D. in 1905 in the Divisions of Ancient Languages and of Modern Languages.
 - April 12, Wed. Stated Meeting of the Board of Overseers.
- RECESS FROM APRIL 16 TO APRIL 22, INCLUSIVE.
- April 27, Thurs. Last day for receiving names of competitors for the Boylston Prizes for Eloquence.
 - May 1, Mon. Last day for receiving applications for admission to the Law School as Special Students.
 - May 1, Mon. Last day for receiving from persons intending to enter College applications for Price Greenleaf Aid for 1905-06.
 - May 1, Mon. Last day for receiving dissertations for the Dante, Sargent, Toppan, Sumner, and Bennett Prizes.
 - May 1, Mon. Notice of intention to compete for the Sales Prize must be given on or before this date.
 - May 1, Mon. Last day for receiving theses of candidates for the degree of Ph.D. (except as above under April 1) or S.D. in 1905.
 - May 1, Mon. Last day for Undergraduates and for Graduate Students to hand in their Commencement Papers.
 - May 1, Mon. Last day for receiving application of candidates for the degree of M.D. or the degree of D.M.D. in 1905.

- May 2, Tues. Last day for receiving applications for College Rooms for 1905-06.
 - May 10, Wed. Stated Meeting of the Board of Overseers.
 - May 11, Thurs. Speaking for the Boylston Prizes.
 - May 15, Mon. Last day for making application for the Ricardo Prize Scholarship.
 - May 15, Mon. Last day for handing in theses for the Philip Washburn Prize.
 - May 30, Tues. Memorial Day: a holiday.
 - May 31, Wed. Last day for receiving from Undergraduates applications for College Scholarships, and for Price Greenleaf Aid for 1905-06.
 - June 1, Thurs. Last day for receiving applications for Medical School Scholarships for 1905-06 (except the Cheever and Hayden Scholarships).
 - June 1, Thurs. Last day for receiving applications for Law School and Scientific School Scholarships for 1905-06.
 - June 1, Thurs. Examinations begin in the Medical and the Dental Schools.
 - June 26-July 1, Mon. to Sat. Examinations for admission to Harvard College, the Lawrence Scientific School, and the Dental School.
 - June 28, Wed. Commencement. Stated Meeting of the Board of Overseers.
- SUMMER VACATION OF THIRTEEN WEEKS, FROM COMMENCEMENT DAY TO SEPTEMBER 27, INCLUSIVE.
- June 29, Thurs. Examination in Chemistry for admission to the Medical School.
 - July 5, Wed. Summer School of the Faculty of Arts and Sciences opens.
 - Sept. 18-23, Mon. to Sat. Examinations for admission to Harvard College, the Lawrence Scientific School, and the Dental School.
 - Sept. 27, Wed. Examination in Chemistry for admission to the Medical School.
 - Sept. 27, Wed. Annual Meeting of the Board of Overseers.
 - Sept. 28, Thurs. Academic Year begins in all departments of the University.

1904.							1905.													
JULY.							JANUARY.							JULY.						
Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa	Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa	Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa
1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28
29	30	31					29	30	31					29	30	31				
AUGUST.							FEBRUARY.							AUGUST.						
Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa	Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa	Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa
1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28
29	30	31					29	30	31					29	30	31				
SEPTEMBER.							MARCH.							SEPTEMBER.						
Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa	Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa	Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa
1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28
29	30	31					29	30	31					29	30	31				
OCTOBER.							APRIL.							OCTOBER.						
Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa	Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa	Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa
1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28
29	30	31					29	30	31					29	30	31				
NOVEMBER.							MAY.							NOVEMBER.						
Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa	Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa	Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa
1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28
29	30	31					29	30	31					29	30	31				
DECEMBER.							JUNE.							DECEMBER.						
Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa	Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa	Su	Mo	Tu	W	Th	Fr	Sa
1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14	8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21	15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28	22	23	24	25	26	27	28
29	30	31					29	30	31					29	30	31				

なお、有島がゴリキーやシエンキューウィチの作品と出会った、ケンブリッジパブリック図書館(写真)は〈図16〉のK(第一の家近く)である。

〈有島の「時間割」と日常生活〉

では、こうした(空間的)生活圏の中で、有島は、どのような(時間的)「日常生活」を送っていたのだろうか。

前々頁〈図18〉は、前掲『カタログ』一九〇四〇五年度版所載の同年「時間割」、また〈図19〉は、同じく、同年度学事日程表・七曜表である。この二つを組み合わせると、ハーバード大学に於ける、有島の(時間的)日常生活が、ある程度再現できる。

〈図18〉の「時間割」を見ると、当時ハーバード大学では、全講義が、「月水金」と「火木土」のグループに分かれ、また、それぞれの講義は、朝八時前から概ね一時間ほどづつ「八時限体勢」で並んでいたことがわかる。どの講義も週三回というハードなものであった。——前章で示した、有島受講課目のカリキュラム上の符号をここで追って行くと、下のような「有島の時間割」が再現できる。

【有島の時間割】

これを見ると、たとえ「学位をとらぬ」つもりであったとしても、有島には、かなり勤勉な学生生活が要求されていた事が分かる。

〈「有島の時間割」再現表〉

		前期・1904/9/26・木～						
時限	1	2	3	4	5	6	7	8
時間		9時～10時				1時半～2時半	2時半～3時半	
月		Fine Arts 4					History of Religions 2	
火		History 18a1				Economics 9a1		
水		Fine Arts 4					History of Religions 2	
木		History 18a1				Economics 9a1		
金		Fine Arts 4					History of Religions 2	
土		History 18a1				Economics 9a1		

		後期・1905/2/13・月～						
時限	1	2	3	4	5	6	7	8
時間		9時～10時				1時半～2時半	2時半～3時半	
月		Fine Arts 4					History of Religions 2	
火						Economics 14b2		
水		Fine Arts 4					History of Religions 2	
木						Economics 14b2		
金		Fine Arts 4					History of Religions 2	
土						Economics 14b2		

しかも有島のハーバード生活は、別稿で詳述するつもりだが、決して「講義のみに追われる」生活などではあり得なかった。金子喜一や「弁護士ピーボディー」と、そして社会主義やホイットマンと激しく出会い、明記されているだけでもかなりの文学作品を読み、更に、日露戦争やロシア第一革命という、時代の問題性を全身で受

け止めつつ、『ロシア革命党の老女』を執筆し平民新聞に送ったのもこの時期だ、思想的危機・内面的な激動を迎えていったのである。

その中でも有島は、少なくとも、例えば①Economicsでは、労働問題や社会主義を扱っている上に、金子喜一も一緒に受けており、講義内容に関して話し合った事も十分想像出来るなど、それなりの意味をもっていただろうし、②Fine Artsは、有島が大きな影響を受けたと思われる前述C・H・ムーア教授の担当であって、この講義には多大な興味を持続して、有島のゴシック・中世芸術観の形成にも役立ったと思われるのである。

が、いずれにせよ、ここでは、上記の如き「日常生活をめぐる外的事実」の確認にとどめておこう。

〈ハーバードにおける、有島の一年間〉

この「時間割」と、既知の有島側資料、及び〈図19〉の学事日程表等を組み合わせると、少なくとも次のような事が分かる（有島日記・書簡等で以前から知られている事は、簡略化ないし省略する）。

〔前期〕

- 一九〇四・九・二七、フィラデルフィアよりケンブリッジ到着。
- ① 九・二九・木、ハーバード大学全学で一斉に前期開始。有島はこの朝、入学受講登録。この日午前中の「History 18a」は受けなかったが、午後一時半より「Economics 9a」初講義を受講。これは金子喜一も受講しており、『迷路』そのままの「ハーバード初日」、早くも出会った可能性もある。

② 同三〇・金、十時より「Fine Arts 4」、午後二時半より「History of Religions 2」の初講義受講。「異常ニ興味ヲ以テシヨ聞キヌ」と感動を記す。

③ 以後、順調に講義を聞き続け、「多クノ智識ハ小時間ニ余ノ脳裏ニ刻ミ込レヌ」と記す。ただ一〇・八金の「History of Religions 2」については前の「感動」とは違い、「卓説ハナシ」と低い評価。このころまでに、ケンブリッジ・パブリック・ライブラリーで、ゴリキリーの『読者』、およびシエンキエーウィチ『ヒンドウ・レジェンド』（『西方古伝』のもと）を読む。前掲拙稿（註6）参照

④ 一〇・一六・日、コンコード行

⑤ 一一・二四・木、感謝祭で休校

⑥ 一二・二三・金、冬休み開始。

⑦ 一九〇五・一・一・日、この日の日記で、既に、金子喜一との親交が、かなり深まっていた事が確認できる。「非国家的思想」の語が記される事、ボストン社会主義集會出席等、既知のとおり。このころエマーソンを読んでいる。

⑧ 一・二・月、旅順陥落。このころ、日露戦争の大報道がアメリカを覆う。シラーを読んでいる。

⑨ 一・三・火、冬休み終了。講義開始。ハーバード大学フォグ美術館（前節参照）のシラー記念会に出席。

⑩ 一・四・水、日記から、このころも講義に出ていた事が確認出来る。

⑪ 一・五・六、ピーボディーと会う。このころ「平民新聞」等も読み、また、思想的な危機が始まっていることが伺える。

⑫ 一・八・日、「激烈ナル觀念」の語、日記に。エンゲルス、カウツキー等に接する。エマーソンを読み続けている。

⑬ 一・一〇・火、雪の中へケンブリッジ第一の家から第二の家・弁護士ピーボディーへに引越す。「朝ノ課業ヲ終ヘタル后」とあるのは「History 18a」を指しているはずで、⑬とともに、まだ受講し続

けていた事を示す。前日も「出校シ」とあり、講義開始早々に不満を記した「宗教史」はやや疑わしいものの、少なくとも「Fine Arts」は、受講し続けていた可能性が高い。

⑭ 一・一二・木、ピーボディーと「社会主義論争」、および彼が「素性ノ知レヌ女性」を連れ込む事。翌日「平民新聞」およびホイットマンについて。

⑮ 一・一四・土、「Prof. Coolidge へ来ラズ」は、「History 18al」の休講を示す(⑬参照)だろう。この日は学位申請の締め切りだが、有島は当然無視。

⑯ 一・一五・日、金子喜一、ボストンの「社会民主党倶楽部 Social Democratic Club of Boston」で、初めての演説。演題は、「誤まり伝えられてゐる日本 Misrepresented Japan」⁽²⁶⁾

⑰ この翌週、ないし翌々週あたりから、各科目とも、前期試験に入った可能性が高い。有島は、試験を受けず、読書などをしてきた。

〔後期〕

○ この間、有島日記は、「二月」とだけで日付のないものが、一回のみ。そこから、『ロシア革命党の老女』執筆がこの頃であった事がわかる。

① 二・一三・月、(医学部以外)後期開始。

② 二・一六・木、この日付の家族宛書簡で、弁護士ピーボディーの所で家事手伝いをしている事を記し、なるべく「自立シテ勉強」したい旨を述べる。

③ 二・二二、水、ワシントン生誕記念日、休校。

④ 四・一一、火、家族宛書簡に、「至而健全日々勉強罷在候」とある。

⑤ 四・一六・日、春休み開始。

⑥ 四・二二・土、春休み終了。

⑦ 五・一・月、博士論文締め切り。有島は当然無視。

⑧ 五・一六・火、両親宛書簡に、「依然元氣日々勉強と労働と起居申候」とあり、また、この年度が終わり、夏休みになったら「マサチューセツト州の稍北方ニユ、ハンプシヤと申候所」で、働く予定を述べている。

⑨ 五・三〇・火、メモリアル・デー休校。

⑩ 六・二八・水、卒業式、以後夏休み。

⑪ 七・二七、両親宛書簡で、「本年一月よりの労働的生活つらき様にて中々面白く勉強之外ニ見聞之智識を増し」「学位を取るの希望ハ無之候ひし事とて終末の試験頃より出席を止め」とある。

〈講義を受けた期間〉

さて、以上に掲げた諸事実から、有島は「成績」こそ取っていないが、少なくとも「前期」においては、ほぼ確実に、登録した全科目を受講し続けていたと思われる。

一方、後期に関しては、有島側の資料が殆どなく、また家族宛書簡等で「勉強している」と記されてあっても、そのまま確実な事だとは言えない。しかし、五月になってからの書簡を見ても分かるが、ピーボディーとの共同生活が、どうやら学期中はずっと続いているらしい事や、ニューハンプシャーでの労働生活を、学期終了後に設定していること等から、やはり、講義の、少なくとも最低一つは、受け続けていたと考えなければ、不自然である。

では有島は、どの講義を、いつまで受講していたのだろうか。前掲「有島の学籍簿」の成績欄を再度見てみたい。そこには、同じ「不修得」にしても、①「abs.」と記された科目(前期半年の「歴

史学 18a1」「経済学 9a1」及び通年科目「美術4」と、②「全くの無記載」科目（後期の「経済学 14b2」及び通年科目「宗教史2」）の別があった。——この二者には違いがあつて当然である。つまり、次のように推測するのが、現有の資料からは、最も妥当であろう。

◇ 有島は、ハーバード大学の前期（概ね第一の家に住んでいたころ）は、総ての講義を受講していた。

◇ 「精神的激動」が本格化した後期（概ね「弁護士ピーボディ」との共同生活期間）においても、有島は、『迷路』のM教授のモデルとなった）中世・ゴシック美術の権威、C・H・ムーア教授の講義だけは、受講し続けていた。

○ おわりに

このように見て来ると、有島の「ハーバード大学における学生生活」を考察するための「外的条件」は、かなりの部分が、ほぼ「推察」の射程内に入ったと言えよう（「はじめに」に注記した拙稿と組み合わせる必要があるが）。——ただ、「有島ハーバード在学時の考察」の為に、他にも、どうしても必要な事が幾つかある。

その第一は、これらの講義の内容と、有島への影響の実証である。むろん、C・H・ムーア教授の「美術」講義が中心になろう。

第二は、このC・H・ムーア教授に関する、資料的な基礎作業

だ。これに関しては、今世紀初頭の欧米における、歴史学、芸術論、美術研究の分野での「中世主義・ミディエヴァリズム」の考察がどうしても必要になろうし、この事は、筆者も続けて来た有島における「中世共感原理」の研究に結合するだろう。

そして第三に、更に大きな視野から言えば、有島と「時代」とのかかわりに関する実証的資料的な基礎作業である。日露戦争と、ロシア第一革命の問題が、その中心となることは言うまでもない。しかし紙幅の関係もあり、以上は別の機会を待たざるを得ない。

註・補論

1 「ニューイングランド時代」とは、①一九〇四（明治三七）年九月以後の（ヘマサチューセツ州・ハーバード大学在学期間）と、②翌年六月以後、（ヘニューハンプシャー州・グリーンランドの農場で労働した期間）とを指す。「ハーバード時代」という呼称を避けたのは、この両者を「総合的」に理解したいが故だ。——有島のヘアメリカ時代を考ふるにあたっては、それを、「ペンシルヴァニア時代」「ニューイングランド時代」「ワシントン時代」の三つに区分すべきだと、筆者は別稿で提案したが、それは、こうした分節化によって、逆に（ヘアメリカ時代）を総体として把握するためである。

2 「ペンシルヴァニア時代」は、さらに、①ヘヴァアフォード大学在学期間と、②ヘフレンド精神病院に勤務した期間とに小区分され、一応、それぞれ独自の意味をもつ。しかし（ヘヴァアフォード大学はもとより）、彼にとって大変厳しい体験の場であったフレンド精神病院さえも、そこはやはり、新渡戸ニエルキントン系の「人

脈」が生きるクエーカー系世界であることに変わりはない。また、フレンド精神病院は（別稿で詳述するが）、その性質上、「世間」から隔絶された別世界であり、有島は未だ、アメリカ合衆国の社会がもつ、ある「堅い実質」と、直接対峙したとは言いい切れない。——従って、（フレンド精神病院勤務期間をも含め）「ペンシルヴァニア時代」は、総じて、有島と（アメリカ合衆国）との「本格的な出会い」が未だ現実のものになっていない段階だと、考えるべきであろう。「本格的な出会い」は、やはり、「ニューイングランド時代」を待たねばならない。有島「ペンシルヴァニア時代」の、こうした〈保護・隔離〉という性格に関しては、別稿で詳述するつもりである。

3 有島武郎『ホイットマンの一断面』大正八年一月

4 有島日記『観想録』（以下「日記」と略記）、明治三十八年一月八日及び同日。

5 位置付けとしては、拙稿『有島武郎と「ゴルキーの小品」及び『西方古伝』について』『弁護士ピーボディー』について』『アヴェンデイルについて』とともに、筆者の〈有島・アメリカ時代研究〉のための一連の基礎作業の一環である。

6 『鹿児島短期大学研究紀要』三七号、昭和六一年三月

7 『白梅学園短期大学紀要』二四号、昭和六三年三月

8 フィラデルフィアからボストンへの路順に関して、有島の日記（明治三十七年九月二六日付）には、「列車ハ Rhode Island ヲ横リテ Connecticut (ママ) ノ丘岡多キ若キ林ノ間ヲ過ギ」とある。が、「ロードアイランドからコネチカット」では、北行の順序が逆である。有島の勘違いだと思われるが、この描写は（多少の変更を受けるもの）勘違いのまま、作品『日記より（六）』（明治四一・六）や『迷路』（序編「首途」最終日記）にも繰り返される。

9 全集解題では、この「原年譜」は、「すべて武郎自身の手になるとは必ずしも言い得ないが、委細に涉り十分に意を体していると判断

されるこの事。

10 書簡番号六九、宮部金吾宛、明治三十七年六月一四日

11 書簡番号七〇、有島家宛、明治三十七年七月一四、一五日

12 瀬沼茂樹『留学前後の有島武郎（下）』（『文学』昭和三十九年二月）小玉晃一『明治の横浜』（昭和五十四年四月、笠間書院）

13 安川定男『悲劇の知識人 有島武郎』（昭和五十八年一月、新典社）

14 安川定男『有島武郎論』（昭和四二年、明治書院）所収

15 瀬沼茂樹・本多秋五編『有島武郎研究』（昭和四七年、右文書院）所収、及び、山田昭夫・内田満編『近代文学資料・有島武郎・下』（昭和五〇年、桜楓社）所収

16 山田昭夫編『鑑賞日本現代文学・有島武郎』（昭和五八年、角川書店）所収

17 金子喜一のアメリカ社会民主党入党は、有島と出会う以前の、明治三六（一九〇三）年四月二二日である。——川上美那子『金子喜一考』（都立大「人文学報」昭和四八年三月）、及び中村勝範『金子喜一論』（慶応大「法学研究」昭和四二年一〇月）による。

18 金子のハーバード大学在学も、（金子の側の資料からは）古くから知られていた。本稿では、これをハーバード大学側の資料から確認する事になる。

19 書簡番号七六、宮部金吾宛、明治三十七年一〇月二七日〜十一月七日

20 日
21 なお、『年次報告書』と『カタログ』間の学生総数の差は、後者が、年度開始時発行、前者が、終了一年後発行という事情による、統計母体の違い、或いは他部門を含んだためではないかと思われる。

22 前掲書簡（七六）には、「當年は大学始申候てより最多く日本学者の集へる年に御座候由、總てにて十一人に御座候。」とある。この「十一人」は、おそらくG S A S だけではなく、ハーバード大学全学での事であろう。

23 川上美那子『金子喜一考』、註18参照。

24 初出「日本文学」昭和三十九年一〇月。

- 25 リプレイ教授の頭文字はRのほず。(有島のMA論文手書き原本でもRとLの間違いが散見される)。
- 26 中村勝範『金子喜一論』、註18参照。
- 27 有島の「中世共感原理」については、拙稿『有島武郎「叛逆者」とへ中世への共感』——クロポトキン・大逆事件に関連しつつ『日本文学』昭和六〇年七月)、『有島武郎「鎌倉幕府初代の農政」とへ中世への共感』の淵源』(『キリスト教文学』五号昭和六一年五月)等を参照されたい。また、江頭太助・高山亮二・長谷川堯各氏の優れた仕事がある。

○ 本稿をなすにあたっては、岩崎ハルコ氏、ロバート・キャンベル氏、ハーバード大学ピューゼイ図書館文書館 Pusey Library, Collection of the Harvard University Archives と同館の司書諸氏に格別のご協力をいただいた他、鹿兒島短期大学・ハーバード大学 G S A S はじめ、前掲拙稿『「弁護士ピポディー」について』や『アヴォンデルについて』稿末に記した諸機関諸氏に大変お世話になった。記名は割愛するが心から感謝申し上げる。

くりた ひろみ (日本近代文学)